

SRID NEWSLETTER

No. 343 June 2004 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

6月号

国際開発で考える事—オセアニア島嶼諸国の現状から—

高千穂 安長 (玉川大学)

お知らせ

1. 夏季シンポジウム 開催日：7月24日(土) 場所：一ツ橋学術総合センター
 - シンポジウム議題：『これまでの30年 これからの30年 世界の中の日本』
 - 出席・欠席の連絡を7月9日(金)までに事務局 三上さん(sridjimu@par.odn.ne.jp) 及びシンポジウム幹事 (西村：Nishimura.Emiko@jica.go.jp及び小川：r-ogawa@jbic.go.jp) までご連絡下さい。
 - 参加される方は、同時にご自分の履歴にも簡単に触れた上でA4一枚以上のレジュームを作成し、小生まで送付して下さい。
(電子データではなくハードコピーの場合は別途ご相談下さいますようお願い申し上げます)
 - 本年度はまだ未定ではありますが、シンポジウムテーマを1つのみとし今回のシンポジウムを踏まえ2月のシンポジウムにて外部講師の招聘等を検討しております。決定致しましたら別途ご連絡申し上げます。
- 以上、宜しく願い申し上げます。又、詳細が決定致しましたらご連絡申し上げます。

国際開発で考える事—オセアニア島嶼諸国の現状から—

高千穂 安長 (玉川大学)

1. オセアニア島嶼諸国の範囲

ここで言うオセアニア島嶼国は、さんご礁で出来た、国土が狭く、開発に対

して狭小性、散在性、隔絶性などの所与の開発制約と、インフラ未整備などの人為的開発制約を抱えている国々を指しています。図1のように、太平洋の赤道を中心とした地域に位置しています。

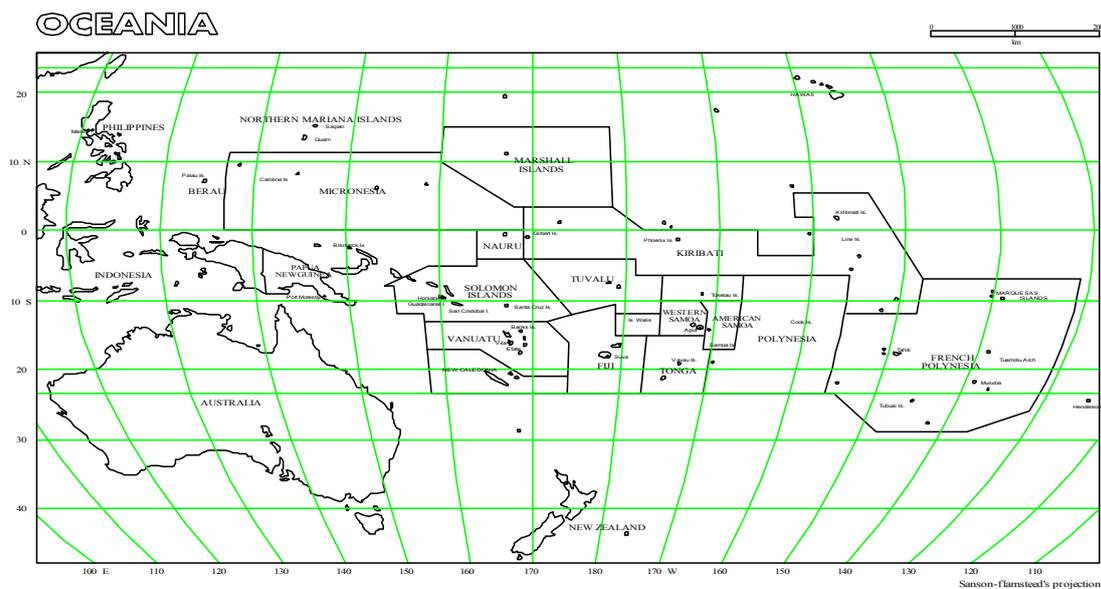


図-1 オセアニア島嶼諸国周辺図

出所：地図ソフト

2. オセアニア島嶼諸国の特徴

(1) 土壌はさんご質で保水力が弱く、栄養分にも乏しいため、植生は貧困です。ただし、ラグーン(礁湖)は格好の漁場であり、また、自然の港湾としての利用には適しています。海鳥が生息し、それらの糞が堆積した結果、リン鉱石となっているケースも見られます。

(2) 国力の状況

図2で分かる通り、オセアニアの島嶼国は、インドネシア、フィリピン、ラオス、カンボジアなどのアジアの国々よりも国土は狭く、人口が少ないにもかかわらず、1人当たりの国民所得は高くなっています。現地に行ってみると、高い生活水準が維持されているのが分かります。これは、政府開発援助(ODA)など各種援助によるもので、これらの援助が無いと、国内に有力な産業もないこれらの国々は財政を維持することもできません。現在、これらの国が直面している悩みは、この援助に依存した生活がいつまで続けられるかということです。

図2 国力比較

国力比較

国名	国土面積	人口(百万人)		国民総所得(2001年)		平均余命
	千 Km2	1992年	2000年	総額 10億ドル	P/hドル	歳
インドネシア	1905	184.3	213.6	144.7	680	66
フィリピン	300	64.3	77	80.8	1050	69
ラオス	237	4.4	5.4	1.6	310	54
カンボジア	177	9.1	12.3	3.3	270	54
トンガ	0.7	0.09	0.1	154	1530	71
サモア	2.8	0.2	0.2	0.3	1520	69
キリバス	0.7	0.07	0.09	77.8	na	62
ミクロネシア	0.7	0.1	0.12	0.2	2150	68
パラオ	0.5	na	0.02	131	6730	70
マーシャル諸島	0.2	0.05	0.05	0.1	2190	65

注:*は 1997 年統計

出所:世界銀行『世界開発報告』各年版

3. オセアニア島嶼諸国の開発の現状

先に述べたように、オセアニア島嶼諸国は、ODAをはじめとする援助により、1人当たりの GNI はかなり高く、豊かな生活を享受しています。このため、すでに先進国に近い大量消費、大量廃棄型の生活が普及し、その結果、例えば、大量の廃棄中古車が野ざらしにされたり、生活廃棄物が堆積し、熱帯地域に位置することによる高温から、腐敗がおこり、その上にスコールが降り注ぎ、汚染された水が地下や海に浸透したりという環境問題も顕在化している状況です。これらの解消のために、廃棄物の腐敗分が流出しないように工夫した福岡方式(JICA, 2004/5, pp9-11)と呼ばれる「ごみ処理技術」を導入するなど、それなりの努力がされていますが、オセアニア島嶼諸国が持つ経済開発の制約ため、困難な状況下にあります。

次の例は、最近日本でも良く知られるようになった事象です。

<廃棄中古車の流れ(トンガの例)>

日本で生産・使用された車⇒中古車としてニュージーランドに輸出⇒ニュージーランドで使用⇒中古車としてトンガに輸出(トンガは、生活水準の向上、主として援助による道路整備から自動車への需要が高まり、1家2台の車保有が進んでいる)⇒トンガで廃車⇒海岸に投棄⇒日本車の墓場

トンガを私が訪ねた約8年前は、その親日ぶりにいたく感激したものでした。し

かし、そのような国で、自動車廃棄放置自体は経済活動の結果であり、日本には何の咎もないはずなのに、あたかも日本が悪いような印象を与える事態を招いているのは残念なことです。

4. 開発に当たって思うこと

開発は、被援助国の国民が、文化的な生活を享受できるように行うのですが、物質の使用は、必ず「廃棄物」を生み出します。今後の開発に当たっては、この「廃棄物」に対して、どのように対応するかということを、常に念頭におく必要があります。

トンガの例のように、快適な生活の後の廃棄物で、生活の質を下げ、観光資源としての国土の質を下げてしまうのは、自殺行為です。経済水準の向上は当然図るべきですが、経済発展の持続可能性についてより高い配慮が望まれます。できれば3R(リデュース、リユース、リサイクル)を徹底し、循環型社会を構築する開発の方向性を志向すべきでしょう。

参考 URL: <http://www.env.go.jp/press/press.php3?.serial=4375>

参考図書 : JICA 『国際協力』 2004 年 5 月号